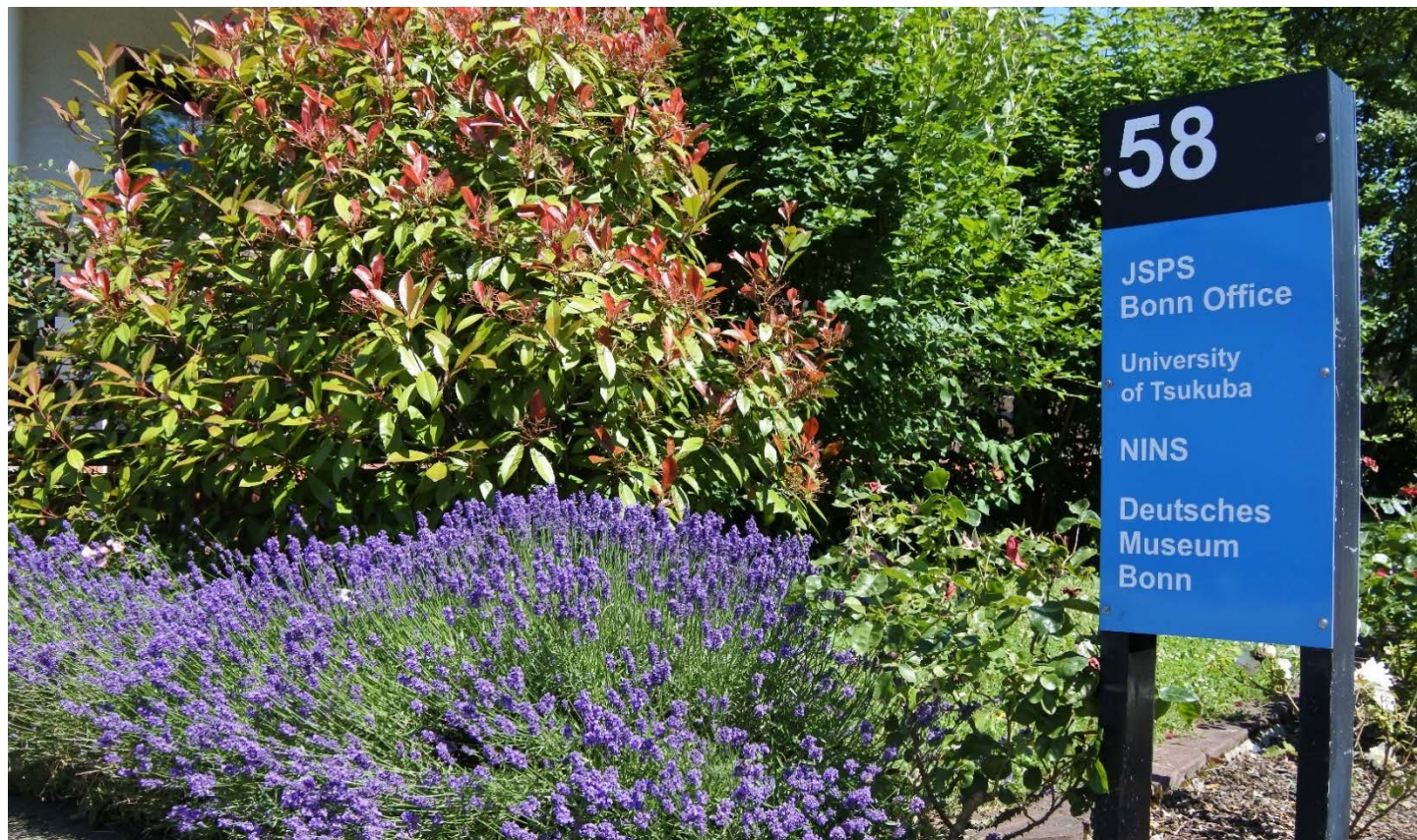




JSPS Bonn Newsletter

2016 年 4 月～6 月 (ぼんぼん時計 No.52)



目次

ピックアップニュース

p2

- ① ドイツ大学長会議 (HRK) がイギリスの EU 離脱に対してコメント
- ② ドイツで研究開発に従事する研究者数が過去最高を記録
- ③ Eucor ヨーロッパキャンパス開設——ドイツ・フランス・スイスの5大学が国境を越えた大学の創設に向けて前進

その他のニュース

p3

イベント活動報告

p13

- ① マックス・プランク協会主催 "Careersteps" に参加
- ② サハラ以南のアフリカ諸国研究振興機関を集めた "Science Africa" に参加

- ③ サマープログラムオリエンテーションを開催

- ④ 第 21 回日独学術シンポジウム「高等教育 - 課題と最近の動向」を開催

- ⑤ 海外特別研究員オリエンテーションおよびキャリアフォーラムを開催

- ⑥ 日独若手専門家交流プログラム「Junior Experts Exchange Program」に参加

- ⑦ JANET FORUM 2016 - Explore Research in Japan- を開催

今後のイベント等

p18

センター長コラム

p19

ドイツの大学紹介 (ベルリン自由大学)

p19

ピックアップニュース

ドイツ大学長会議（HRK）がイギリスの EU 離脱に対してコメント

6 月 23 日に行われたイギリスの EU 離脱の是非を問う国民投票の結果について、ドイツ大学長会議のヒップラー会長は「大学にとっても EU 離脱は深刻な転機を意味する」としたうえで、次のとおりコメントした。

「離脱というこの結果は、イギリスの大学はもちろん全ヨーロッパの高等教育機関および研究機関に大きなショックを与えただろう。ヨーロッパでの支援プログラムや交流プログラムについてイギリスを包含するための条件について、大がかりな話し合いは時間を要するし、こうした困難な過渡期に対して準備をしなければならない。

ドイツの大学と HRK にとっても、イギリスの EU 離脱は手痛い転機になるだろう。我々はあらゆる点でとりわけイギリスとは密接な関係を保ってきた。ドイツとイギリスではヨーロッパでの研究支援を、質のみ基準として方針を定めるという重要な原理を共有している。また、研究や学生、研究者の交流に関する協力関係は非常に活発であり、国民経済と相互理解に対して肯定的かつ持続的効果がある。我々はイギリスとドイツをはじめ、全 EU の大学間協力を変わず継続するために、あらゆる努力を尽くすつもりである。

近いうちに EU とイギリス間の合意によって基盤が築き直され、学術的協力と学生交流において引き続き必要な支援がされることが望ましい。イギリスが反ヨーロッパという決定をしたとはいえ、ヨーロッパの高等教育領域における不利益を必要最小限に抑えるために、我々は政治的責任者へ訴えかけるであろう」

イギリスの EU 離脱に関する国民投票に先立ち、英国大学協会（UUK）と HRK は 6 月 2 日の理事会で EU 離脱に対して反対を表明していた。

HRK : <https://www.hrk.de/presse/pressemitteilungen/pressemitteilung/meldung/hrk-praesident-zum-brexit-tiefer-einschnitt-auch-fuer-die-hochschulen-3981/> (24 Jun. 2016)

ドイツで研究開発に従事する研究者数が過去最高を記録

5 月 11 日に連邦内閣が閣議決定した「研究とイノベーション報告書 2016」（Bundesbericht Forschung und Innovation 2016）において、研究開発に関するポストの数は 2005 年から 2014 年の間に約 30% 増加し、ドイツにおいて研究開発に携わる人の数が初めて 60 万人を超えたことが報告された。これによりドイツの研究開発費は過去最高となった。

ドイツでは、国・産業界・学術界が研究開発に投資する額が、ここ数年連続して伸びている。2014 年には過去最高となり、投資額が 840 億ユーロにのぼった。そのうちの 570 億ユーロ、つまり 3 分の 2 以上は産業界からの支出によるものである。

また、連邦政府も研究開発には優先的に資金を拠出しており、2014 年は 142 億ユーロに達した。2005 年と比較すると、60% 増の 90 億ユーロの増額である。2016 年の研究開発費の予算案は、過去最高の 158 億ユーロに達する。

欧州連合（EU）においては、全研究開発費の 30% をドイツが負担している。10 の卓越したイノベーション企業のうち、5 社がドイツ企業であることから、ドイツは EU における研究開発の重要国であり、また世界的にもイノベーション先進国に入るといえるだろう。これらのことは、ドイツで出版された学術論文の 17% 弱が国際的に最も引用数の高い論文の中に入り、この比率が最高値を更新したことから分かる。

一方、集中的に研究開発を行った製品の輸出が増加し、アメリカに次いで第二位の位置についているが（第三位は中国）、世界的な競争の圧力は強まっている。たとえば、日本においては世界市場における人口 100 万人あたりの重要特許数の比率は過去 10 年で上昇した結果 52% を記録しており、最近ではドイツの比率をやや上回っているが、これに対してドイツでは 9% の増加にとどまっている。依然として高い水準にあるとはいえ、ドイツの強い競争力を国際市場において長期的に維持するためには、未来のトレンド、そして新しい課題への挑戦は欠かせない。

BMBF : <https://www.bmbf.de/de/nie-gab-es-mehr-jobs-in-forschung-und-entwicklung-2847.html> (11 May 2016)

ピックアップニュース

Eucor ヨーロッパキャンパス開設——ドイツ・フランス・スイスの5大学が国境を越えた大学の創設に向けて前進

バーゼル大学、フライブルク大学、オート・アルザス大学、ストラスブール大学ならびにカールスルーエ工科大学は、ライン川上流域ヨーロッパ大学連合（Eucor）のヨーロッパキャンパスの開所式を5月11日ストラスブール大学パレにおいて執り行った。これにより、ヨーロッパキャンパスは単体として活動することができるようになり、初のヨーロッパ大学の創設に向けて大きな一歩を踏み出した。初の理事長にはフライブルク大学のシーヴァー大長が選出され3年間の任期を務める。

ヨーロッパキャンパスは、大学だけで組織および運営される最初の欧州領域団体（EGTC）であり、5つの大学はそれぞれの自治性を保持したまま、一方で一つの法人格として今後活動することができる。これにより、ライン川上流域において共通の研究・教育戦略を発展させ、国境を越えた研究組織の創設が可能となる。

Eucor : <http://www.eucor-uni.org/en/2016/05/11/thinking-knows-no-boundaries> (11 May 2016)

その他のニュース

外国人研究者はドイツで快適な研究環境を享受

ドイツ学術交流会（DAAD）とドイツ大学長会議（HRK）が共同で運営している国際高等教育マーケティングのコンソーシアムである GATE-Germany は、外国人研究者はドイツの大学が魅力的な研究環境や平等な機会を提供していると感じているという調査結果を先日発表した。この調査はドイツ連邦教育研究省（BMBF）の助成のもと、博士号を持つ外国人研究者に対し、ドイツを選んだ理由、自身の職業や社会での融合、キャリアプランについて尋ねたものである。

連邦教育研究大臣であるヴァンカ氏は「近年ドイツの大学は国際化され、様々な国から研究者が来ている。彼らのうちの3人に1人が5年以上ドイツに滞在することを望んでいることから、ドイツでの研究生活を快適だと感じており、またそれが彼らの研究やドイツ人の同僚との関係にも反映されている」と述べた。また、連邦政府の支援による、フンボルト財団の教授制度やソフィア・コワレフスカヤ賞のような国際化プログラムは、このような研究者に対する魅力を増大させることに貢献している、とも付け加えた。

回答者の大半は、研究環境と職業面での融合について、大変良いと回答している。さらに、大学のサポートも満足度を高める重要な要因として挙げられている。

DAAD のヴィンターマンテル会長は「研究の質の高さに加えて、大学における歓迎する文化も国際的な魅力として欠かすことはできない。外国人研究者たちが我々の

大学にうまく融合することを喜ばしく思っている」と述べた。

回答からは、外国人研究者が主に職業環境において社会と接触していることが示されている。彼らは主にドイツ人の同僚と関わりが深く、職場以外でドイツ人と接することはまれであり、大学の外でのホスピタリティについては批判的であった。

HRK のヒップラー会長は「多くの大学において着実に根付いている歓迎する文化は、研究室やキャンパスを越えて広がっていくべきであり、大学本部や街や市が改善していく必要がある。我々はこのことについてともに働き続けていくべきである」と述べた。

HRK : <http://www.hrk.de/press/press-releases/press-release/meldung/new-study-international-researchers-feel-at-home-in-germany-3930/> (23 Mar. 2016)

外国人研究者の流動性の妨げの解消にむけて前進

この10年以上、ドイツ学長会議（HRK）は外国人研究者の獲得や留学生のドイツへの入学の妨げの解消に熱心に取り組んできた。連邦教育研究省（BMBF）の助成を受けた5年間のHRKの「欧州高等教育圏における流動性障害除去プロジェクト（Reducing mobility

その他のニュース

obstacles in the European Higher Education Area) は、今、終わりを迎えようとしている。

HRK のヒップラー議長によると、粘り強く熱心な取り組みによりプロジェクトは成功を収めているという。そして、流動性の妨げとなっているものを解消することは、「ドイツのような研究やイノベーションに重点を置く国が、他の国からトップクラスの研究者を惹きつける唯一の方法である」と述べた。

2005 年に HRK が欧州委員会の提言による「研究者に関する欧州憲章および研究者の募集に関する行動規範」に署名したことが、この取り組みの機動力となった。以来、HRK は社会保障や滞在に関する法律上の多くの問題点にかかる解決策を考案し、たとえば滞在に関する法律については連邦移民・難民庁、外国人局、連邦内務省ならびに外務省とともに取り組み、こうした法律にかかる情報は大学へ提供された。

とりわけ老齢年金に関する問題は、ドイツ年金保険等の年金を扱う公立の組織との継続中の会談での主題であったが、BMBF が出資する流動的な外国人研究者のための情報ポータル「findyourpension」の例のように、結果的に改善された。

HRK のヒップラー議長は、「BMBF の支援により、長期間にわたる困難な問題に関するプロジェクトに取り組むことができた。たとえば、EU 圏外からの高レベルな研究者のための滞在に関する状況は、非常に小さなステップを数多く積み重ねることにより改善できたものだ。外国人研究者に対する滞在に関する法律は、ドイツはおそらく欧州で最もリベラルであるだろう。過去、外国人研究者は老齢年金の一部を無駄にしなければならなかったが、長期間の滞在するのであれば、現在ではよりよい法的環境と助言を享受できる。将来においては、たとえばリサーチ・アシスタントや博士後期課程学生として 3 年以上ドイツに滞在するトップクラスの若手研究者は、彼らが受ける資格のあるどの退職給付も失うことはないだろう」と述べた。これは、2015 年末に EU 流動性指令に関して開かれた連邦議会でも可決された法律によって保障されており、連邦労働社会省のもとで導入されている。ヒップラー議長は、ドイツにおける研究とイノベーションはこれらの輝かしい判断の恩恵を受けるだろう、と加えた。

HRK : <https://www.hrk.de/press/press-releases/press-release/meldung/obstacles-to->

[mobility-for-international-researchers-in-germany-are-crumbling-3928/](https://www.hrk.de/press/press-release/mobility-for-international-researchers-in-germany-are-crumbling-3928/) (23 Mar. 2016)

ドイツの国際研究マーケティングが新たな段階に突入

フンボルト財団、ドイツ学術交流会 (DAAD)、ドイツ研究振興協会 (DFG) ならびにフラウンホーファー協会は、4 月、国際研究マーケティングプロジェクトの新たな段階を開始することとなった。このプロジェクトは連邦教育研究省 (BMBF) の助成によるものであり、BMBF の「リサーチ・イン・ジャーマニー—発想の国ドイツ」の一環である。「リサーチ・イン・ジャーマニー—発想の国 ドイツ」は、ドイツの研究成果とイノベーション可能性を海外において宣伝し、ドイツの大学や研究所、中小企業 (SMEs) における研究マーケティングを支援することを目的としている。これにより、国際研究市場との提携を拡大しつつ、現場においては研究場所としてのドイツを宣伝することができる。

申請開始時期は 2016 年春とされ、合計 160 万ユーロを超える賞金は、ドイツの大学や研究所が国際的な研究マーケティング活動を実施し、ドイツを強力なパートナーかつグローバルサイエンスシステムにおける研究場所としてより明確にすることを支援するものである。

成功したコンセプトや内部ネットワークを活用した知識管理、国際会議・フェアでの活動等の情報や経験を共有するために、ワークショップが今後数年間開催される。加えて、ドイツの大学や研究所、研究ネットワーク、中小企業は、プロジェクトの期間を通して、海外でのプレゼンテーションやプレス活動、国内でのイノベーション巡行に参加する機会がより増える。

2016 年から 2019 年のプロジェクト期間に関するすべての活動やデータ、参加の機会ならびに公募開始に関する情報はリサーチ・イン・ジャーマニーのサイト (www.research-in-germany.org) で確認することができる。

AvH : <https://www.humboldt-foundation.de/web/press-release-2016-05.html>
(6 Apr. 2016)

新研究イニシアティブにより建物と都市のエネルギー転換を促進

その他のニュース

連邦経済エネルギー省（BMWi）および連邦教育研究省は、本日、エネルギー効率的で気候にやさしい建物と都市のための共同研究イニシアティブを開始した。この共同研究は「太陽光を活用した建物／高効率エネルギー化都市」と名付けられ、建物や都市のエネルギー転換を促進するため、さらなる高効率エネルギー技術および再生可能エネルギーに焦点を当てており、2050 年までに建築に関する主要なエネルギー需要を 2008 年比で 80% 程度低減させることを目標としている。

このプロジェクトでは、技術的な側面以外にも、社会政策や社会経済的な側面も考慮されており、イノベーションおよびスマート技術によるエネルギー的に高効率の住みよい都市をいかにして作るか示すこともねらいとされている。連邦政府は当該イニシアティブに 1 億 5,000 万ユーロ、最高で 5 年間する予定である。

BMBF : <https://www.bmbf.de/de/neue-forschungsinitiative-staerkt-energieumwende-in-gebaeuden-und-staedten-2661.html> (11 Apr. 2016)

共同学術会議（GWK）の次期エクセレンス・イニシアティブに関する決定に対し、ドイツ大学長会議（HRK）が批評

ドイツ大学長会議（HRK）のヒップラー議長は、本日共同学術会議（GWK）において決定された次期エクセレンス・イニシアティブに関する選考方法について、賛同すると同時に批判した。

連邦と州が、審査の観点を学術的な質にのみ置くことで合意した点については賛同する、しかし、いわゆるエリート大学と呼ばれる第二の助成分野に関しては応募条件がうまく規定されなかった、とヒップラー議長は述べ、その理由を「エリート大学への助成を申請するためには、少なくとも二つ以上のエクセレンス・クラスターが採択されていなければならない。しかしこれはドイツの大学の多様性と能力に対応しておらず、大学の規模を過度に重視する羽目になっている。国際的な大学事情に通じていれば、最も成果を収めている大学が必ずしも大規模な大学であるとは限らないことを知っているだろう」とした。

また、大学がエクセレンス・クラスターの審査方法についてどのようなものになるのか、懸念を抱いている、とし、「審査は、内容と関係のない理由による時間的制

限の中で行われるものであってはならない。適切でない時間的制限の中で申請書の審査をしなければならないようでは、全審査過程の質が低下し、それにより審査結果もあまり好ましいものではなくなる」と続いて述べた。

HRK :

<http://www.hrk.de/presse/pressemitteilungen/pressemitteilung/meldung/gwk-entscheidung-zur-nachfolge-der-exzellenzinitiative-hrk-praesident-kritisiert-hohe-huerde-zur-zweiten-foerderlinie-3944/> (22 Apr. 2016)

DFG は次期エクセレンス・イニシアティブに関する連邦・州間の合意書を歓迎

ドイツ研究振興協会（DFG）は、共同学術会議（GWK）において本日合意されたエクセレンス・イニシアティブの継承としての新しい連邦・州間のイニシアティブに歓迎の意を示した。DFG は過去二期にわたる同プログラムで中心的な役割を果たしてきた機関である。

今回合意された内容は、エクセレンス・クラスターに重点が置かれており、これは DFG が担当し成果をあげてきたこれまでのエクセレンス・クラスターの助成枠を引き続き受け継ぐものであり、こうした重点設定とその内容は、当該助成枠のみならずエクセレンス・イニシアティブ全体を進展させるために DFG とエクセレンス・イニシアティブに関する専門家委員会が行ってきた提言を基にしている。これにより、エクセレンス・クラスターは将来的にもドイツの研究制度に非常に活力を与え、そのポテンシャルを高め国際的に可視化されるだろう。

DFG :

http://www.dfg.de/service/presse/pressemitteilung/en/2016/pressemitteilung_nr_16/index.html (22 Apr. 2016)

難民に対する大学進学支援を実施

連邦教育研究省（BMBF）とドイツ学術交流会（DAAD）は、迅速な難民の統合のために、大学進学のための支援を実施する。この支援によって、将来的に無料での大学入学能力試験の受験、大学への入学申請が可能となる。この際、uni-assist という外国人学生のための大学入学サービスセンターが窓口となり、大学進学を希望する難民に対して専門分野決定に関するカウンセリ

その他のニュース

ングや診断テストを実施し、uni-assist に対しては DAAD を通じて BMBF が助成を行う。

uni-assist は、外国人留学生から uni-assist の会員である約 170 の大学への入学申請をとりまとめて受け付け、カウンセリングや診断テストを実施するほか、外国人留学生の成績証明書がドイツの大学進学基準を満たしているかどうかの調査を代行している。大学側が希望した場合には、ドイツ語能力などのさらなる基準についても検査を行い、必要書類がすべて揃った時点で uni-assist は大学へ外国人留学生の入学申請書を送付している。入学の可否については大学において判断される。

BMBF : <https://www.bmbf.de/de/fluechtlinge-auf-dem-weg-an-die-hochschule-unterstuetzen-2760.html> (29 Apr. 2016)

スター外国人研究者をドイツへ呼び寄せるアレクサンダー・フォン・フンボルト講座

フンボルト財団 (AvH) のアレクサンダー・フォン・フンボルト講座の特別式典が開催され、女性 3 人、男性 3 人の合計 6 人の海外トップ研究者に当該講座が授与された。受賞者は大学から推薦されており、それぞれビーレフェルト大学、ボン大学、ハレ大学およびヘルムホルツ環境研究センターライプツィヒ、カールスルーエ工科大学、ミュンヘン大学およびミュンスター大学で研究を開始する。受賞者には、実験を行う研究分野には 500 万ユーロ、理論研究を行う分野には 350 万ユーロが支給される。

AvH のシュヴァルツ理事長は、当該講座はドイツで研究を行うことの魅力を優秀な外国人研究者に提示していると述べたうえで、その理由を「新たな外部資金への申請書を書き続けることなく完全に研究に集中できる環境を提供するものであり、この環境こそがこの賞を国際的に魅力あるものにしている」と述べた。

また、連邦教育研究省 (BMBF) のクヴェネット＝ティレン事務次官は、当該講座がドイツに世界のトップ研究者を呼び寄せることに成功したと述べ、さらに大学にとっても理想的な国際化戦略の要因であり、かつ、各大学において新しい研究分野を進展させ、認知度を上げることが可能にした、と評価している。

AvH は当該講座によって毎年 10 人を上限に、外国で国際的に活躍しているあらゆる分野の研究者を表彰している。審査においては、候補者の優れた学術研究成果の

みならず、大学側が候補者とその研究チームに対して提供する長期的な展望に関するコンセプトも重要な観点となっている。また、この講座は BMBF からの助成を受けるものである。研究とイノベーションはこれらの輝かしい判断の恩恵を受けるだろう、と加えた。

AvH : <https://www.humboldt-foundation.de/web/press-release-2016-07.html>
(3 May 2016)

ドイツの大学が最も国際化されているとの調査結果

ブリティッシュ・カウンシルによる 26 ヶ国の大学の国際化に関する調査「国際高等教育のかたち」(The Shape of Global Higher Education) の結果、ドイツの大学が首位に立っていることが報告された。この調査は、高等教育システムの国際化に関する基本的枠組みを比較したもので、大学の流動性を高めるために国際化に対する政府レベルの取組みに関した「開放性」、国際的な流動性を支える制度設計としての「質保証と認証」、「高等教育システムと持続性への道」という 3 つの基準グループにおいて、37 の質的な指標を手掛かりに 26 カ国を比較・調査している。

ドイツは、国際化戦略、高等教育の構造、大学の質保証および流動性措置ならびに助成措置について、特にバランスがとれ、相互に関連し合っていることがアメリカやイギリスより際立っているとされている。また、外国人留学生のための手厚い基本的枠組みについて強調されており、たとえば、外国人留学生のための大学入学やその後のサポートに限らず、就職にまで及んでおり、ドイツでは外国人留学生は大学卒業後自分に合った職を見つけるために 18 ヶ月間滞在許可を延長することができることなどがあげられる。

DAAD : <https://www.daad.de/presse/pressemitteilungen/2016/de/42952-deutsche-hochschulen-sind-international-gut-aufgestellt/> (6 May 2016)

ドイツ大学長会議が理事会メンバーを選出

ベルリンで開催されたドイツ大学長会議 (HRK) の総会において、8 月からの新たな理事会のメンバーが選出された。ベルリン・ボイト工科大学のグロース学長が新

その他のニュース

たに理事として2年の任期で着任する。同氏は2015年の3月よりHRK常任委員会のメンバーを務めている。また、グライフスヴァルト大学のヴェーバー学長、コンスタンツ大学のリュディガー学長の2年間の再任も決定された。

理事会においては、総会にて選出される5名の理事のほか、大学および専門大学のメンバーグループから選ばれる2名の代表者が理事として着任することとなっており、こちらはすでにデュースブルク＝エッセン大学のラトケ学長、フルダ大学のカクザール学長が選出されている。現在、情報インフラ分野担当理事であるバートラム教授は、7月末をもって理事を退任する予定である。

HRK : <https://www.hrk.de/press/press-releases/press-release/meldung/hrk-executive-board-elections-3953/> (10 May 2016)

ドイツ大学長会議はエクセレンス・イニシアティブの継続のために正しい政策決定や手続き方法の変革を要求

ドイツ大学長会議 (HRK) は4月22日に発表された共同学術会議 (GWK) のエクセレンス・イニシアティブ継続に関するコンセプトがエクセレンス・クラスターの推進に集中すること、また、首尾一貫して学術的な審査方法とすることを肯定的に評価している。優れたエクセレンス・クラスターの申請により、大学への助成を集めるだけでなく、それにより大学全体を強化する可能性についても明確にした。

HRKはこれまでに明らかにされたトップレベルの研究をさらに推進させる計画に対して、特にエリート大学に関する採択要件とそのスケジューリングに関して批判を行ってきた。少なくとも2つのエクセレンス・クラスターが採択されることをエリート大学への採択要件に結びつけることは、多様であるドイツの大学の状況に適合するものではなく、小規模の大学にとっては不利な要件である。将来的に小規模のエクセレンス・クラスターも支援されたとしても、解決されるものではないだろう。いずれにせよ、約50とされる支援を受けるクラスター数の柔軟化が必要である。

HRKの会員総会では、エクセレンスクラスターの採択等に関する規定の明確化も要求された。不正を避けるための透明性の確立が求められる。

HRK :

<https://www.hrk.de/presse/pressemitteilungen/pressemitteilung/meldung/hrk-zu-nachfolge-exzellenzinitiative-richtige-grundsatzentscheidungen-veraenderungsbedarf-bei-verfahren-3951/> (11 May 2016)

ホルスト・ヒップラー氏に対し、ストラスブール大学の名誉博士授与へ

ドイツ大学長会議 (HRK) のヒップラー議長に対し、5月11日ストラスブール大学より名誉博士が授与された。ストラスブール大学のベレッツ学長は授与に際し、ヒップラー議長の欧州に対する仕事を特に評価した。

その一つが、ヒップラー議長が、ライン川上流域の大学間の協力関係の発展について長年にわたって寄与してきたことにある。バーゼル大学、フライブルク大学、オート・アルザス大学、ストラスブール大学そしてヒップラー氏がHRK議長になるまで学長を務めていたカールスルーエ工科大学は、1980年代の終わりよりライン川上流域ヨーロッパ大学連合 (Eucor) として提携しており、昨年の終わりには、連合の機能強化を目的として、ヨーロッパキャンパスを設立、5月11日に開設のレセプションが催された。

また同氏はHRK議長としても、欧州での協力関係や研究環境においてドイツの高等教育機関の強固な地位のために尽力した。

ストラスブール大学は欧州の評価の高い高等教育機関の一つであり、1970年代の3つの大学への分離を経て、ルイ・パスツール大学、マルク・ブロック大学、ロベール・シューマン大学ならびに教員教育大学センター (IUFM) が統合して2009年に誕生した。

※Eucor ヨーロッパキャンパス：2015年12月、バーゼル大学、フライブルク大学、オート・アルザス大学、ストラスブール大学、カールスルーエ工科大学により設立、2016年より3年間EUのINTERREGプログラムの支援を受ける予定。ヨーロッパキャンパス設立により、各大学の自治は保持したまま、ドイツ、フランス、スイスそしてヨーロッパにおいて助成金申請書を送付することが可能となる。また、デュアルディグリーや共同研究、研究機器の共有が実現され、若手研究者や留学生を引き寄せるよう働くことが見込まれる。

その他のニュース

HRK :

<https://www.hrk.de/presse/pressemitteilungen/pressemitteilung/meldung/ehrendoktorwuerde-der-universite-de-strasbourg-fuer-horst-hippler-3952/>
(11 May 2016)

新しい枠組みが求められる大学医学部のあり方

ドイツ大学長会議（HRK）は、大学および大学病院の継続的な資金不足の影響を危惧する決議を行い、若い医師にとって学術的なキャリアの魅力が十分でないことを指摘した。また同時に、大学、学部、大学病院が責任共同体としてどのように機能できるかということについても示した。

大学医学部の役割は多角的である。医療研究の核心を成し、若い学術世代を教育し資格を付与する責任を負っている一方、ドイツの医療サービスの中心であり、革新的な治療を実施している。

しかし、大学病院の財政状況はここ数年急激に悪化している。「現在の患者治療に関する包括報酬制度では、大学病院の特別の機能と費用が考慮されていない。そのため大部分の大学病院で、顕著な赤字になっている」とヴェーバー副会長は述べている。

HRKのヒップラー会長は、「このために、ここ数年、教育と研究が慢性的に犠牲となっている。また大学への支出の停滞も著しく、近代的な医学研究を行うには、多くの建物の老朽化が進んでいる」と述べた。

HRK :

<https://www.hrk.de/presse/pressemitteilungen/pressemitteilung/meldung/universitaetsmedizin-braucht-bessere-rahmenbedingungen-integraler-bestandteil-der-universitaeten-3949/> (13 May 2016)

ヴァンカ連邦研究教育相が G7 科学技術大臣会合のために日本へ出発

G7 科学技術大臣会合は、貧困に起因する感染症（PRDs）や顧みられない熱帯病（NTDs）、海洋の未来、革新的エネルギーの技術開発等といった地球規模課題に取り組むため、研究協力を強化している。5 月 15 日から 17 日にかけて日本のつくば市で開かれる今回の会合では、2015 年 10 月にベルリンで開催された前回の G7

科学技術大臣会合でのトピックについて、引き続き議論が行われる予定である。

2015 年の会合後、提言を受けて、PRDs にかかる研究活動と国別データの共有は、主に感染症を中心に進められてきた。海洋研究においても、国際協力のための新たな枠組みが進められ、海洋システムにおけるマイクロプラスチックを探索する国際プロジェクトも“Healthy and Productive Seas and Oceans”という欧州委員会の共同プログラミングイニシアティブ（JPI）の下で着手されてきた。このプロジェクトでは、マイクロプラスチックの測定、海洋エコシステムにおけるマイクロプラスチックの分布のマッピング、そして海洋生物へのプラスチックの潜在的な毒性効果の調査のための発展的基準が定められた。クリーン・エネルギーについては、ベルリンでの 2015 年の G7 科学技術大臣会合における決定に基づいて、クリーン・エネルギー関連の研究開発強化に係る国際イニシアティブ「ミッション・イノベーション」が 2015 年 11 月のパリでの COP21 にて立ち上げられた。このイニシアティブには多くの他の国々が参加している。G7 科学技術大臣会合はクリーン・エネルギーに対する責任を再度表明し、このイニシアティブの活発な推進にともに取り組んでいる。

今年のアジェンダで取り上げられる新しいトピックとしては、高齢化と高齢者ケアに関する研究イノベーションの促進、科学技術イノベーション分野における女性の参画の拡大、次世代の研究者の人材育成支援の提供や、どのようにしてインクルーシブ・イノベーションの理念を確実にするか、すなわち、研究イノベーションがどのようにして産業国や全世界におけるすべての人々に対して利益になるか、といったことがあげられる。

つくばでの会合において、研究協力を進めるため、科学技術大臣らはさらなる努力を期待している。連邦教育研究省（BMBF）のヴァンカ大臣は、「昨年の G7 科学技術大臣会合でよい連携を持てたことから、今年の会合でも引き続き 2015 年の課題を取り上げることとなった。昨年の協力の成果である PRDs や海洋の未来、クリーン・エネルギーに関する問題について、さらに具体的な議論に踏み込んで合意を得ることができるだろう。一過性のものとしないうちにも喜ばしいことである」と述べた。

ヴァンカ大臣は日本とドイツの二国間協力がどのように G7 の目標を果たす手助けをすることができるか、日本側と議論する予定である。両国とも、科学協力の長い伝統に卓越している研究国家であるため、それを行う強

その他のニュース

い立場にある。適切な事例でいうと、ドイツ人研究者による高エネルギー加速器研究機構（KEK）の共同利用があげられる。現在、600 以上のドイツと日本の大学の共同研究が存在しており、ドイツの研究組織は日本側パートナーと密接な関係にあるといえるだろう。たとえば、マックス・プランク研究所は、日本の最も大規模で総合的な研究施設である理研と 30 年以上協力してきている。

ヴァンカ大臣は、ボッシュ、BMW、ダイムラー、BASF といったドイツの研究を主導する企業の日本支社の代表とも会談する予定である。日本との科学技術協力における企業の展望を知ることが狙いとしており、高齢化社会によって引き起こされる研究イノベーションが直面する課題や、自動運転技術等の研究について議論するとされている。

BMBF :

<http://www.bmbf.de/de/bundesforschungsminister-in-wanka-reist-nach-japan-2857.html> (13 May 2016)

若手研究者協定とイノベティブ大学プログラムについてドイツ大学長会議（HRK）会長がコメント

本日の共同学会会議（GWK）の「若手研究者協定」および「イノベティブ大学」の決議に対し、ドイツ大学長会議（HRK）のヒッラー会長が以下のとおり述べた。「イノベティブ大学プログラムについては、大学が構造的な資金不足に悩んでいることを鑑みれば、年間 5,500 万ユーロは少額とはいえそれでも明らかな効果をもたらすだろう。一方で、若手研究者協定については、1,000 人のデニュアトラック教授の採用が望まれていたにも関わらず、現在の拠出予定金額ではその数のポストを十分にまかなうことはできない。総額 10 億ユーロ、デニュアトラック教授（W1/W2 クラス）一人につき 6 年から 8 年の助成期間、これに加えて 15% の戦略的交付金では、必要経費を大きく下回することはあらかじめ明らかで、中身のともなった研究活動は不可能である。これでは優秀な研究者を獲得するにあたって、国内外の競争で断念せざるを得ず、あるいは大学側が不足分を負担しなければならないおそれがある。

それ以外にも、多くの大学では教授のポストを増やすよりも、どちらかといえば教授ポストと同程度に有望なキャリアパスとなる教授以外のポストのほうが必要とさ

れている。一方、大学は若手研究者のためのキャリア支援要綱において提示した人材開発構想は、正しく前進しているといえる」

HRK :

<https://www.hrk.de/presse/pressemitteilungen/pressemitteilung/meldung/nachwuchspakt-und-programm-innovative-hochschule-bedarfe-der-hochschulen-nicht-ausreichend-getroffen-3956/>
(20 May 2016)

ドイツ研究振興協会（DFG）は新たに 18 の Graduiertenkolleg の設立を決定

ドイツ研究振興協会（DFG）の Graduiertenkolleg 承認委員会はさらなるドイツの若手研究者の支援に向けて新たに 18 の Graduiertenkolleg (GRK : 大学院博士課程特別コース) (※) の設立を決定した。それらにはイタリアと韓国との新しい 2 つの Internationale Graduiertenkollegs (IGK) が含まれている。Graduiertenkolleg 承認委員会は、また、14 の GRK の 4 年半の延長を承認した。

GRK には 4 年半の助成期間の初期に約 7,400 万ユーロが投資されることとなる。DFG は現在 194 の GRK を支援しており、その中には 40 の IGK が含まれている。新しい GRK は、ベルリン自由大学、フンボルト大学、ベルリン工科大学、ビーレフェルト大学、ボーフム大学、ブラウンシュバイク大学、ブレーメン大学、ダルムシュタット工科大学、デュッセルドルフ大学、フランクフルト大学、フライブルク大学、ハノーファー大学、カールスルーエ工科大学、マールブルク大学、ミュンヘン大学、レーゲンスブルク大学、シュトゥットガルト大学、ウルム大学に設置される予定である。

※ Graduiertenkolleg（ドイツ語）、Research Training Group（英語）若手研究者育成のため、各大学によって設立される大学院博士課程特別コース。大学院共同コリキウムと訳すこともある。DFG により採択された大学は最長 9 年間、DFG から資金提供を受ける。本事業は、テーマを定めた研究プログラム及び体系的な人材育成の方針に基づく博士学位取得に重点が置かれ、学際的な取り組みを行うグループを支援することにより、複雑化した研究者雇用市場に対応した博士研究者を育成し、研究者としての早期自立を促進することを目的とする。

その他のニュース

DFG :
http://www.dfg.de/en/service/press/press_release_s/2016/press_release_no_18/index.html (23 May 2016)

ドイツ研究振興協会（DFG）が新たに 20 の特別研究領域プログラム（SFB）を支援

ドイツ研究振興協会（DFG）は特別研究領域プログラム承認委員会の決議により、20 の新しい特別研究領域プログラム（SFB）を設立し、1 億 7,400 万ユーロを助成することを決定した。これに助成合計額の 22% が間接経費として措置される見込みである。新たな 20 のうちの 6 つの SFB は、地域越境的 SFB であり、複数の研究所にわたることとなる。

すべての新しい SFB は 2016 年 7 月 1 日より開始され、まず最初の 4 年半の期間支援を受ける予定である。また特別研究領域プログラム承認委員会は 24 の既存の SFB をさらに延長することを決定した。この結果、2016 年 7 月から DFG の支援を受ける SFB は合計 264 にのぼることとなる。

新しい SFB の詳細は、リンク元の記事参照。

DFG :
http://www.dfg.de/en/service/press/press_release_s/2016/press_release_no_20/index.html (27 May 2016)

上昇し続けるドイツ全国奨学金プログラムによる奨学生数

2015 年、全国奨学金プログラムにより 2 万 4,300 人が支援を受け、これにより昨年度に対して 8% 多い大学生が支援されたことが、5 月 30 日に連邦統計庁が発表した最新データから明らかになった。2011 年夏学期に初めて奨学生を受け入れてから 5 年、大学は支援金の調達と支給のための効果的な組織を築き、2015 年には約 7,000 の民間支援者により 2,530 万ユーロが調達されたことにより、全国奨学金プログラムは才能の育成において定着したといえるだろう。

全国奨学金プログラムでは、学生は収入にかかわらず月に 300 ユーロ支給され、その半分を企業や財団、個人等の民間が、残りの半分を連邦政府が負担する内訳となっている。近年、連邦教育研究省（BMBF）は、優れた

若者に対する支援を拡大しており、2015 年は合計 5 万 6,000 人以上の学生が連邦政府資金からの奨学金の支援を受けている。



BMBF : <https://www.bmbf.de/de/private-foerderung-87-millionen-euro-fuer-talentierte-studierende-2914.html> (30 May 2016)

ドイツ学術交流会（DAAD）が学術交流について前向きに総括

2015 年、ドイツ学術交流会（DAAD）は 7 万 5,412 人のドイツ人および 5 万 1,627 人の外国人の学生あるいは研究者に対して海外への滞在を支援した。この数字は 2014 年に対して合計 5% の上昇を示している。支援プログラムの対象は、短期留学から博士課程、インターンシップから客員教員、情報交換のための訪問から外国での課程の設置やドイツの大学の設立までなど、多岐にわたっている。

2015 年、ドイツの大学に学籍登録を行った外国人学生が 32 万 1,569 人にのぼったことを受け、ドイツは世界で最も人気のある留学先 5 ヶ国のひとつに数えられることとなった。特に申請者数が多かったのはロシア、アメリカ、ウクライナからであり、また、発展途上国に関するマスタープログラムにも多くの申請数を記録した。一方、DAAD に申請するドイツ人にとって最も人気のある行先は、西ヨーロッパと北アメリカである。

流動性を促進する柱となっているものは、DAAD が対応機関となっているエラスムス・プラス（Erasmus+）というプログラムである。エラスムス・プラスでは、1 ～ 2 セメスターの留学がより柔軟になり、学士、修士および博士課程という全課程においてさらに多くの海外への滞在が可能となっている。また、ヨーロッパ外との交

その他のニュース

流も可能となり、2015 年は計 4 万 2,000 人の学生、大学職員および教員がヨーロッパ各国で支援を受けた。

DAAD :

<https://www.daad.de/presse/pressemitteilungen/2016/de/43461-daad-zieht-positive-bilanz-fuer-den-wissenschaftsaustausch/> (31 May 2016)

連邦教育研究省が 2 億 4,000 万ユーロを投資する医療技術専門プログラムを発表

連邦教育研究省 (BMBF) は、本日新しい医療技術専門プログラム「医療技術専門プログラム」を発表した。最新の医療やオーダーメイド医療に対する期待が増大している高齢化社会における課題に対処しようとするプログラムである。

当該プログラムは、医療技術分野での BMBF 助成のパラダイムシフトを裏付ける重要なマイルストーンとして位置付けられる。今後、医療機器の開発過程において、開発対象の製品が実際の医療に適用できることがあらかじめ求められるようになる。さらに BMBF は、企業がその研究をさらに患者のニーズに合わせられるように、企業に対し治療に関する知識を提供するよう支援する予定である。

これは、科学技術・保健・経済政策の三つをまたぐイノベーション政策の基盤を作ることを目標とした戦略プロセス「医療技術におけるイノベーション」の成果でもある。BMBF は、今後 5 年で 2 億 4,000 万ユーロを当該プログラムへ投資する見込みである。

BMBF :

<https://www.bmbf.de/de/patientenversorgung-verbessern-innovationskraft-staerken-2929.html>
(31 May 2016)

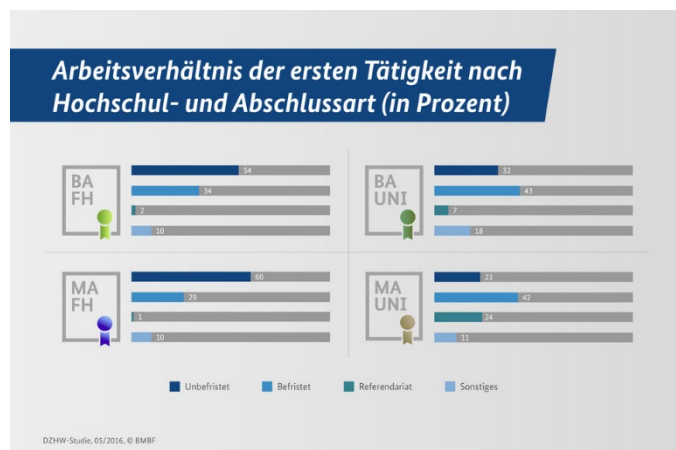
学部卒業生と修士課程修了者に関する新しい進路調査結果が公表

連邦教育研究省 (BMBF) の助成によるドイツ高等教育科学研究センター (DZHW) の最新の調査より、修士課程修了者の 90% が修了後 18 ヶ月の間に就職先を見つけることが明らかになった。この調査にはカッセル大学国際高等教育センター (INCHER) が収集したデータも考慮されている。それによると、専門大学で勉強した学

生は、修了後すぐに無期雇用の職を見つける割合が特に高いとのことである。

専門大学の学生の半分が初めて就職において無期雇用の契約を結んでいるが、それに対して総合大学の学生は有期雇用または試補制度 (国家試験後の実習段階) に就くことが多い。

この調査では、総合大学・専門大学の学生は平均して 3 ヶ月半仕事を探すところだが、2013 年の卒業生はそれ以前の調査の結果よりも早く就職先を見つけている。専門大学の学部卒業生または修士課程修了者のうち、60% 以上が修めた専門科目に関する職あるいは同等のレベルの職を見つけている。一方、総合大学の学生においては、その割合は学部卒業生が 46%、修士課程修了者が 76% である。産業別にみると、新社会人の 40% 以上が卒業した大学や学位にかかわらず、サービス業 (研究、文化関係を除く) で働いている。



(↑「大学卒業・学位取得後の最初の職における労働条件」)
グラフ引用元 :

<https://www.bmbf.de/de/fachhochschulabsolventen-finden-schneller-unbefristete-jobs-2978.html>

BMBF :

<https://www.bmbf.de/de/fachhochschulabsolventen-finden-schneller-unbefristete-jobs-2978.html>
(9 Jun. 2016)

講義への出席義務に関する問題について、法律の制定は不適切であると指摘

近年ニーダーザクセン州、ノルトライン＝ヴェストファーレン州、シュレスヴィヒ＝ホルシュタイン州において議論されている高等教育法案の素案や、ザールラント



その他のニュース

州およびチューリング州において改正準備されている法律が、大学自治を侵害するのではないかと懸念されている。

6月15日のベルリンでのドイツ大学長会議（HRK）の理事会において、講義の出席義務に関する問題については大学において対応されるべきであり、法律を定めることは不適切であると指摘された。

理事会後、ヒップラー会長は「大学には適切な法律が求められている」としたうえで、「学生たちはきちんと学ぶためには講義への出席が必要不可欠だと認識しており、これが事実であるかどうかは学生との対話によってのみはかりうるものである。法律を制定しようとしたところで、大学を不安定に陥れるか、もしくは非常に細かい実施規則をもたらす結果にしかならないだろう。いずれにしても、課程の質を保証するという目的を果たすものではない」と述べた。

HRK : <https://www.hrk.de/press/press-releases/press-release/meldung/mandatory-attendance-is-a-matter-for-the-universities-3979/>
(15 Jun. 2016)

ドイツ研究振興協会（DFG）とドイツ学術審議会（WR）はエクセレンス戦略に関する州と連邦の合意を歓迎

ドイツ研究振興協会（DFG）とドイツ学術審議会（WR）は、6月16日に連邦と州がエクセレンス戦略に関して合意に至ったことを歓迎した。

この決議されたエクセレンス戦略は、エクセレンス・クラスターおよびエリート大学の二つの助成枠を基盤としている。従来のエクセレンス・イニシアティブによる実績を拡充し、また、従来のエクセレンス・イニシアティブで得られた活力を学術制度内でさらに高めるであろう生産的な競争がこの基盤から発生するとされている。これはドイツの学術および学術制度全体にとって利益となるだろう。

従来のエクセレンス・イニシアティブと同様、エクセレンス戦略においても DFG および WR が選考過程を担う予定である。

DFG : <http://www.dfg.de/service/presse/pressemitteilung>

[en/2016/pressemitteilung_nr_24/index.html](https://www.hrk.de/press/pressemitteilung_nr_24/index.html) (17 Jun. 2016)

連邦政府と州政府首脳による新支援プログラムの合意に対しドイツ大学長会議（HRK）が安堵を表明

6月16日メルケル首相と州首相間でのエクセレンス戦略、若手研究者協定および「イノベティブ大学」に関する合意を受けて、ドイツ大学長会議（HRK）のヒップラー会長は、安堵を表明した。

若手研究者協定およびイノベティブ大学は、非常に重要な課題について補完的に対応するものであり、今後具体化させていくにあたり初期の段階で学術的な専門意見を必ず取り入れるべきである。

HRK : <https://www.hrk.de/presse/pressemitteilungen/pressemitteilung/meldung/hrk-praesident-erleichtert-ueber-entscheidung-fuer-neue-foerderprogramme-3975/> (17 Jun. 2016)

イベント活動報告

マックス・プランク協会主催“Careersteps”に参加

日程：2016年4月25日（月）

場所：マックス・プランクゲッティンゲンキャンパス（Max Planck Campus Göttingen）

参加者：Albers 職員、西村国際協力員

マックス・プランクゲッティンゲンキャンパスにて開催されたポストドク研究者のためのキャリアパスに関するイベント Careersteps において、ブース参加にて JSPS フェローシッププログラムの広報活動を行った。

本イベントは、マックス・プランク協会、ゲッティンゲン大学神経科学・生物物理学・分子生物学大学院（GGNB）およびマックス・プランク生物物理化学研究所の共催によって、学術界および産業界へのキャリアパスについてポストドク研究者を対象として開催されたものである。



会場の様子

本センターのブースには、日本での研究活動に関心を持つポストドク研究者が多く立

ち寄り、外国人特別研究員事業や二国間共同研究事業について具体的な質問が寄せられた。中でも一年以内の滞在を対象とした外国人特別研究員（欧米短期）が参加者の興味を特に引いていたようであった。参加者の多くはドイツ国外の出身者で、ドイツの研究環境の国際性が印象的であった。

関連 URL：<https://www.mpg.de/career/careersteps>



会場エントランス

サハラ以南のアフリカ諸国研究振興機関を集めた“Science Africa”に参加

日程：2016年4月25日（月）～26日（火）

場所：Hotel Maritim（ケーニヒスヴィンター市）

参加者：小平センター長、西崎副センター長

本会のパートナー機関であるドイツ研究振興協会（DFG）がアフリカ諸国の研究振興機関幹部らを招き、ボン近郊のケーニヒスヴィンターで“Science Africa”と題したイベントを開催し、本会からも JSPS 事業の広報を兼ねて参加した。

このイベントは、南アフリカ国立研究財団（NRF）との協力のもと、サハラ以南のアフリカ17か国の研究振興機関幹部とド

イツを中心とする先進国の研究振興機関幹部らが集い、ファンディングエージェンシーに共通する課題への対応等を議論するとともに、参加者間のネットワークを強化することを目的として開かれた。アフリカ諸国からは、現在発展途上にあるファンディングエージェンシーの在り方やその効率的な運営について各国の状況が報告され、議論を交わした。

ドイツからは DFG をはじめとして、連邦教育研究省（BMBF）、ドイツ航空宇宙センター（DLR）、フンボルト財団（AvH）、ドイツ学術交流会（DAAD）、フォルクスワーゲン財団やライブニッツ協会（WGL）が参加し、加えてアメリカ、カナダ、フランスおよび日本からも各国における研究支援の在り方やファンディングエージェンシーの組織運営について情報提供がなされた。本会を代表して小平センター長が発表を行い、JSPS の予算、組織構造や展開する研究補助プログラムの概要等について説明し、意見交換を行った。

休憩時間には情報テーブルを設置し、本部国際事業部国際企画課の溝田職員とともに、本会のフェローシップや共同研究支援事業等の情報提供を行う機会に恵まれたが、特に個人向けの外国人招へい事業に多くの関心が寄せられた。今回の参加者は、サハラ以南のアフリカ諸国で設立されていくファンディングエージェンシーや科学技術関係省庁の幹部候補であり、本会のプレゼンスを向上させるという意味で大きな意義があったと思われる。



集合写真

イベント活動報告

サマープログラムオリエンテーションを開催

日程：2016年5月3日（火）

場所：グスタフ・シュトレゼマン・インスティテュート（ボン）

JSPS サマープログラム2016の参加者を対象とした事前オリエンテーションを開催し、11名の参加があった。本プログラムは、欧米主要国の博士号取得前後の研究者を、夏期2カ月間日本に招致し、日本の文化や研究システムに関するオリエンテーションと日本側受入研究者の下での研究機会を提供するものである。

小平センター長の挨拶により開会し、本プログラムの審査に協力いただいているドイツ学術交流会（DAAD）のアジア・太平洋地域担当 Osinski 氏より DAAD の事業紹介が行われた。参加者による自己紹介をはさみ、近藤国際協力員によりサマープログラムの概要説明、西崎副センター長より JSPS の国際事業について紹介があった。休憩の後は、前年度のプログラム

参加者である Kajopoulos 氏（ミュンヘン工科大学）ならびに Sekulla 氏（カールスルーエ工科大学）により自身の経験談が語られ、ディスカッションの時間には活発に意見交換が行われた。最後にドイツ語圏日本学術振興会同窓会（JSPS Club）によって同窓会の紹介が行われた。



ディスカッションの様子

ディスカッションでは特に、インターネット環境や交通手段などの日常生活面について質問が集中した。参加者の中にはすでに日本への留学経験がある者もあり、前年の参加者の2人だけでなく参加者の中でも相互に経験談が紹介され広がりのある議論となった。

本プログラムでは日本到着後に参加者全体でのオリエンテーションやホームステイを経験することができ、初めて日本に滞在する研究者にとって非常に日本の生活に馴染みやすいものとなっている。これを機に日独研究者の交流が深まり、将来にわたって広がることが期待される。



集合写真

第21回日独学術シンポジウム「高等教育 - 課題と最近の動向」を開催

日時：2016年5月20日（金）～21日（土）

場所：オルデンプルク大学（Carl von Ossietzky Universität Oldenburg）

本センターは、5月20日及び21日の2日間にわたり、ドイツ語圏日本学術振興会研究者同窓会との共催で、「高等教育 - 課題と最近の動向」をテーマとした第21回日独学術シンポジウムを開催した。当日は、同窓会員を含む JSPS 事業経験者を中心として約130名の参加者が集まった。

オープニングにおいて、本センターの小平センター長、同窓会会長である Prof. Dr. Heinrich Menkhaus 及びホスト大学であるオルデンプルク大学の Prof. Dr. Esther Ruigendijk 副学長による挨拶が行われ、シンポジウムの成功に向けた期待が述べられた。



集合写真

イベント活動報告

1 日目には、イントロダクションの後、日独の第一線の研究者による高等教育に関する講演が行われた。最初のセッションでは、「日独の高等教育について」の講演が行われ、日本からは東北大学の米澤彰純教授に、日本における大学ランキングトップ 100 に日本の 10 大学が入ることを目指す国家的取り組み等について講演いただいた。また、ドイツ側からは高等教育研究の第一人者であるカッセル大学の Ulrich Teichler 教授をお招きし、日独の教育に費やす時間と研究に費やす時間の差、大学間・研究所間の異動についての比較等をご説明いただき、それぞれから日独の高等教育現場における違いや現状についての講演が行われた。引き続き、第 2 セッションでは「教師の教育についての革新」をテーマに講演が行われ、日本側から三重大大学の伊藤敏子教授、ドイツ側からドルトムント工科大学の Lothar Wigger 教授を招へいし、日独における教員養成の取り組み等についてお話しいただいた。講演後の質疑応答やコーヒープレイクでも活発な議論や意見交換が行われ盛り上がりを見せた。

セッション終了後には、会場近くのレストランにおいて、情報交換夕食会が開催された。ドイツ語圏日本学術振興会研究者同窓会から、日独の学術交流に貢献したとして、慶応義塾大学の佐藤望教授に JSPS Alumni Club Award が贈呈された後、和やかな雰囲気の中、日独の研究者による交流が行われた。

2 日目に行われたセッションでは、「自然科学と医学分野における教授法」についての講演が行われ、名古屋大学の伴信太郎教授から、過去 20 年間の日本での医療教育の変化や日本の医療教育機関における人口統計的・経済的変化への対応の遅れが課題となっている点が述べられた。また、ドイツ側からはエアランゲン大学の Eckhardt Hahn 教授に講演いただき、ドイツにおける新しいカリキュラムの導入や、能力に応じた医療教育への移行が遅れている等の課題が述べられ、1 日目に引き続き議論は大変な盛り上がりを見せた。セッション終了後には、本センターの小平センター長より、シンポジウムが盛況のうちに終了したことへの謝辞とともに、今後の日独学術交流のさらなる発展への期待が述べられた。

なお、本シンポジウムのプログラム及び講演者の CV、アブストラクト、講演で使われた資料等は、本センターのホームページ（関連 URL 参照）に掲載している。

関連 URL : <http://www.jsps-bonn.de/veranstaltungen/treffen-der-jsps-stipendiaten/2016-higher-education/>



小平センター長による開会の挨拶



Prof. Ulrich Teichler (INCHER Kassel)による講演



東北大学米澤教授による講演



佐藤教授への JSPS Alumni Club Award 贈呈

イベント活動報告

海外特別研究員オリエンテーションおよびキャリアフォーラムを開催

日程：2016年6月11日（土）

場所：グスタフ・シュトレゼマン・インスティテュート（ボン）

平成28年度採用海外特別研究員（ドイツ派遣）を対象にしたオリエンテーションおよびキャリアフォーラムを開催した。

本イベントはJSPS海外研究連絡センターのミッションの一つである「研究者ネットワークの構築とフォローアップ活動」の一環として、在独日本人研究者のネットワーク形成支援を目的として、今年度初めて実施されたものである。

小平センター長の挨拶によって開会し、まずは参加者による自己紹介および研究概要の紹介を行った。続いて、マックス・プランク経験美学研究所のポストドクトラルリサーチフェローである坂本泰宏先生ならびにマックス・プランク陸生微生物学研究所の嶋盛吾先生より、ドイツにおける研究環境およびキャリア形成について、経験に基づい



集合写真

て講演いただいた。坂本先生からはドイツにおける外部資金の紹介をはじめ日常面およびキャリアデザイン面の双方の視点からドイツでの研究生活に関してお話があり、嶋先生からはドイツでキャリアパスを築くにあたってどのようなパターンがあるのか複数の実例をもって紹介があった。いずれもこれからドイツにて研究生活を本格化させていく参加者にとって大変有益なもので、興味深く耳を傾けていた。講演のあとは、今後のキャリア形成を見据えたドイツでの研究生活について、ディスカッションを行い、人生設計や研究環境をふまえた多様な意見が参加者間で活発に交換された。続いて、「科学技術イノベーション人材育成～若手研究者育成支援を中心に～」と題して、文部科学省科学技術・学術政策局の坂本氏より、卓越研究員事業をはじめとする各若手研究者育成支援事業の概要が紹介された。その後、本センター西崎副センター長から本会国際事業や各日本人研究者ネットワークの案内があり、ドイツ語圏日本学術振興会研究者同窓会のProf. Dr. Fleck（ジークン大学）より、日独学術交流支援の取組みについて紹介があった。



ディスカッションの様子

本イベント後に行ったアンケートでは、嶋先生と坂本先生のご講演を通してこれまで曖昧だったキャリアパスやその選択肢が明確化された、といった声や、他分野の研究者との交流をはかれたことによりその多様なバックグラウンドに基づく経験談や意見交換ができ、大変有意義だったとする意見が多く寄せられ、中には二日にわたるプログラムを要望する声もあった。

海外特別研究員は互いに連絡を取る手段がなく、それぞれ手探りで研究生活をスタートさせなければならなかったが、本イベントを通して採用後の早い段階で今後のキャリア構築に関する情報交換の機会を持つことで、ドイツでの研究滞在を円滑かつ効果的に進められることが期待される。

日独若手専門家交流プログラム「Junior Experts Exchange Program」に参加

日程：2016年6月13日（月）

場所：連邦教育研究省（BMBF）（ボン市）

参加者：小平センター長、西崎副センター長

ドイツ連邦教育研究省（BMBF）において、日独若手専門家交流プログラム（Junior Experts Exchange Program）に参加する日本人若手研究者8名を対象に、BMBF、ドイツ研究振興協会（DFG）、アレクサンダー・フォン・フンボルト

イベント活動報告

ト財団（AvH）および日本学術振興会（JSPS）による研究助成や日独研究交流促進のための取り組み等の紹介が行われた。

このプログラムは、日独間の学術対話を強化することを目的としてベルリン日独センターが BMBF の協力を得て実施するもので、日本の大学・研究所・企業等の若手研究者をドイツに招待し、約 10 日間にわたりドイツ各地の大学・研究所を訪問してドイツの研究者と意見交換する機会を提供する。対象者は自然科学系の 40 歳以下の官民の研究者で、毎回専門分野を特定して実施しているが、今年は「高齢化社会（特に健康とテクノロジー）」をテーマに実施された。

当日は、BMBF の Nicole Zingsheim アジア・オセアニア担当課長補佐から歓迎の挨拶と BMBF の概要説明があり、続いて同 Katrin Nostadt 人口変動および人間・機械の相互作用担当課長補佐による高齢化社会における人間と機械との関わり方についての研究紹介が行われた。さらに、DFG の Dr. Franziska Langer 国際交流担当による研究助成制度の説明、フンボルト財団の Dr. Tina-Maria Schieder アジアプログラム部長による AvH の概要説明に続いて、西崎副センター長が日独研究連携を支援するための JSPS 事業やフェローシップ等を紹介した。

プログラムを通じて、両国の研究助成の枠組みや、医療介護分野におけるロボットの活用に関する日独の相違点等について活発な意見交換が行われた。また、今回の参加者には科学技術振興機構（JST）および日本医療研究開発機構（AMED）の職員が含まれており、研究助成機関としての視点を含んだ議論が展開されるとともに、本センター職員にとっても貴重なネットワーク構築の機会となった。

関連 URL : http://www.mofa.go.jp/mofaj/erp/c_see/de/page25_000343.html

JANET FORUM 2016 –Explore Research in Japan– を開催

日時：2016 年 6 月 30 日（木）

場所：ベルリン自由大学（Freie Universität Berlin）

本センターでは、日本の学術機関拠点間の緩やかな連携ネットワークである JANET（在欧日本学術拠点ネットワーク）の第 1 回合同イベント JANET FORUM 2016 を筑波大学と共催で開催した。今回はベルリン自由大学をホスト大学として“Explore Research in Japan”をテーマに掲げ、日本側から JANET メンバー関係者等 57 名、ドイツ側からはブースのみの参加者含め約 70 名が参加した。

当日は、ベルリン自由大学の Prof. Peter-André Alt 学長、筑波大学の永田学長、在ドイツ日本国大使館の八木大使による挨拶により、初めての JANET FORUM 及び JANET の今後の発展に対する期待の言葉があり、その後、ベルリン自由大学教授 3 名によるドイツにおける人文・社会科学及び自然科学の研究概況等についての講演が行われた。引き続いて、ドイツ大学長会議（HRK）、ドイツ研究振興協会（DFG）、アレクサンダー・フォン・フンボルト財団（AvH）やドイツ学術交流会（DAAD）といった学術振興機関による事業紹介や日独研究協力の事例紹介等が行われた。午後には、日本人研究者によるドイツの研究環境や国際共同研究に向けた取り組みについての講演や、日本から参加した大学・学術機関によるエレベーター・ピッチでの研究紹介、本センターや本会ドイツ語圏同窓会及び日本文化会館によるフェローシップの紹介等が行われ、ドイツの学生・研究者等の一般参加者を含む多くの参加者が熱心に耳を傾けていた。



八木在ドイツ日本国大使による挨拶



筑波大学永田学長による挨拶

イベント活動報告

また、会場前のエントランスホールに日本側参加者及びドイツの学術機関がブースを設置し、情報交換や広報活動を行った。多くの学生や研究者がそれぞれのブースで資料を受け取ったり質問をしたりする姿が見られ、本センターのブースにおいても、日本での研究に関心がある学生や研究者等に対してフェローシッププログラムの説明を行う等、有意義な広報活動を展開することができた。

さらに、昼食時やコーヒースタンド時には日独の参加者による交流が図られ、日独間また日本の大学間での活発な意見交換が行われた。

最終セッションにおいて、JANET の今後の活動等についての議論がなされ、JANET の活動範囲の拡大に伴い、英語名称である「Japan Academic Northern Europe Network」から Northern を除き、今後新たな名称を定めること、来年度は名古屋大学が企画機関を務め、ホスト大学はフライブルク大学を予定していること、JANET 運営に当たっては、核となるいくつかの大学・機関から成る幹事組織を立ち上げること、また、JANET の方針や運営体制、上記幹事組織の役割などを定めた「取り決め」を作成することが決議され、閉会となった。

なお、イベントの前日には在欧日本学術拠点ネットワークの第一回フォーラムを祝したレセプションが在ドイツ日本国大使公邸にて開催され、日本の大学の学長等を含む 77 名が参加した。また、イベント翌日にはベルリン自由大学を訪れ、同大における国際戦略、研究支援の取り組み等のプレゼンを受けて議論を交わすとともに、2005 年にオープンした近未来的な図書館を見学し、ドイツを代表する大学である同大について理解を深める貴重な機会となった。

なお、本イベントのプログラム及び講演で使われた資料等は、本センターのホームページ（関連 URL 参照）に掲載している。

関連 URL : <http://www.jsps-bonn.de/ja/janet/janet-forum-2016/>



講演の様子



ブースの様子

今後のイベント等

7月7日（木）～8日（金）	DAAD Netzwerkkonferenz
9月8日（木）	日本人研究者ネットワーク（JR-Net）連絡会議、JSPS Abend（ボン）
11月11日（金）～12日（土）	ドイツ語圏日本学術振興会研究者同窓会主催 会員による会員の招待、ジュニアフォーラム（ハノーファー）
2017年1月11日（水）～12日（木）	日独学術コロキウム（スイス・バーゼル）

センター長コラム

4月以降、西村・近藤二人の新たな国際協力員が着任し、西崎副センター長のリーダーシップの下で、語学研修をしながら、力強くセンター業務を担ってきてくれている。

6月の末になって二つの大きな行事がベルリンで有った。日独合同学長会議と JANET-FORUM2016 である。前者は日本の大学長クラスの 70 人近くの代表団と中心的なドイツ大学の学長や社会各分野の専門家が参加して、「教育、研究、イノベーション—大学がみずから抱く学問の本質的価値と社会からの要請の狭間における高等教育」といったテーマで講演発表・討議が行われ、私も陪席した。後者は日本の大学・学術機関が欧州に置いている事務所・拠点間の緩やかなネットワーク（略称 JANET：昨秋発足）の最初の合同行事で、「研究」をテーマに日本側から 60 人程度、ほぼ同数のドイツ側からの参加者を得て、日独の学術情報の交換や交流が図られ、ボン・センターは筑波大学ボン事務所と共同で実施事務局を務めた。

これからの時代は「閉じて競争」から「開いて協力」へと移り変わっていく。しかし、「開いて協力」を実現するには相互理解と相互信頼が欠かせない。そして、これは一朝一夕になるものではない。基本的には草の根の個々の研究者の永年の交流の上に成り立つが、上には学長会議レベルの交流もある。その中間にあって、欧州で日常的に活動している現場の事務所・拠点担当者は様々な課題を抱えていて、JANET はその共有と解決にも役立つようとしている。

日独学長会議では、性急な改革を迫られている日本の大学の社会的要請に応じようとする姿と、伝統的に高い人間形成を理念とするドイツの総合大学の在り方の間に落差が感じられた。ドイツでは高等教育機関は基本的に州が責任をもって運営し（現在は学費無料の州が多い）、マックス・プランク研究所などの研究機関は別に連邦政府の下に運営されていて、実体的にも大きな違いがある。欧州で拠点活動をしていると、この落差に悩まされることも少なくない。学長会議や JANET-FORUM への日独双方の学術関係者の参加を通して、少しでも相互理解と相互信頼が深まることを期待したい。

JANET には現在 28 の学術機関が登録されていて、筑波大学、名古屋大学、東北大学を始め、北海道大学、千葉大学、慶応大学、大阪大学もネットワーク組織の運営に積極的に協力を申し出ており、活動範囲もヨーロッパの広い地域に亘っている状況に鑑みて、JSPS の在欧 4 センターも連携して JANET を支援して行こうとしている。「小さく生んで大きく育つ」ようにと願っているが、これからの更なる努力と工夫が求められている。

（小平桂一・2016 年 7 月 10 日）

ドイツの大学紹介：ベルリン自由大学



JANET FORUM 2016 の会場にもなった Henry Ford Bau

ドイツの首都ベルリンに位置するベルリン自由大学は 1948 年創立の総合大学で、ベルリンに所在する 4 つの大学の中でも最も規模の大きな大学である。冷戦下の旧東ドイツで大学統制が強められる中、旧東ドイツに位置していたフリードリヒ・ヴィルヘルム大学ベルリン（今日のフンボルト大学ベルリン）において、これに反発する学生や同調する教員・研究者らがマックス・プランク研究所などの協力を得て、ベルリンの旧西ドイツ側に新たな大学を設立したのが始まりである。

11 の学部に加えてフンボルト大学ベルリンと共同で運営しているシャリテ医科大学を擁し、34,170 人※1 の学生が緑あふれる広大なキャンパスで学んでいる。自然科学に加え、人文・社会科学にも重点が置かれているのが特徴的で、125 カ国の学生や研究者が在籍している国際的な大学でもある。

また、第二期エクセレンス・イニシアティブ※2 において、いわゆる「エリート大学」に選出された 11 大学のうちの一つでもあり、同大は第一期に引き続いて選出された。研究においても、ドイツで最も権威のある賞であるゴットフリ

ドイツの大学紹介：ベルリン自由大学

ート ヴィルヘルム ライブニッツ賞※3 の受賞者を現在までに 17 人輩出する等、ドイツを代表する大学の一つと言えるだろう。

学内にある「ブレイン（脳）」と呼ばれる言語学図書館は、仕切りのない一つの空間として設計された革新的な図書館で、柔らかい自然光が多く差し込む心地よい場所であり、多くの学生や研究者に利用されている。

※1 2016 年 7 月 1 日に開催した JANET FORUM 2016 に付随する施設見学における Dr.Herbert Greieshop のプレゼン中の数値。

<http://www.jsps-bonn.de/ja/janet/janet-forum-2016/>

※2 エクセレンス・イニシアティブには、大学を機関全体として強化することで、学術的な国際競争力を高め、一流の研究機関として認知度を上げるための支援である「将来構想（エリート大学）」、研究の潜在力をドイツの大学に集結して、国際的な認知度と競争力を強化するための支援である「エクセレンス・クラスター」、若い研究者の養成と研究の発展を支援する「大学院コース」という 3 つのカテゴリーがあり、同大は「大学院コース」にも選出されると同時に、フンボルト大学ベルリンと共同で「エクセレンス・クラスター」にも選出されている。

http://www.dfg.de/en/research_funding/programmes/excellence_initiative/

※3 特に優れた研究者の研究環境の改善、研究の可能性の拡大、研究者、特に優秀な若手人材から研究以外の業務負担を軽減することを目的に 1985 年に創設された賞で、第三者からの推薦で挙げられた候補者の中から、最終的に DFG 協議会により受賞者が決定される。受賞者の中には、後にノーベル賞を受賞した研究者も多くいる。なお、受賞者には 250 万ユーロが贈呈される。

http://www.dfg.de/en/funded_projects/prizewinners/leibniz_prize/

国際協力員コラム

ドイツの春の風物詩といえば、なんといっても白アスパラガス（Spargel シュパーゲル）。4 月になると収穫が始まり、6 月 24 日でもってその年のシーズンが終わります。収穫時期を定めてしっかり根を休ませることで、また次の春においしいシュパーゲルが収穫されるというわけです。このように、ドイツ人のシュパーゲルにかける熱意は相当なもので、シュパーゲル専用の皮むき機はあたりまえ、専用の茹でる鍋もあるそうです。

バターソースやオランダーズソースで食べるのが最も基本的な料理法ですが、この時期のレストランではシュパーゲルのシーズンメニューが提供されており、Portion Spargel mit Rinderfilet（シュパーゲルの牛ステーキ添え）なんていうものも。私のお気に入りにはバターソースと生ハム添えで、ハムの塩気がシュパーゲルの甘みを引き立ててより美味しく感じられました。（西村国際協力員）



シュパーゲルの生ハム添え

日本学術振興会ボン研究連絡センター

JSPS Bonn Office

Wissenschaftszentrum

Ahrstrasse 58, D-53175 Bonn（事務所住所）

Postfach 20 14 48, D-53144 Bonn（郵便物用）

Tel. +49(0)228-375050

Fax +49(0)228-957777

www.jsps-bonn.de